

異常気象に対応した 土づくり、稲づくりを

長岡農業普及指導センター

稲作情報 No. 2

代表電話：0258-38-2554

E-mail : ngt111440@pref.niigata.lg.jp

1. 根の健全な発達を促すため、耕深 15cm を目標に耕うん作業を実施する。
2. 土壌診断に基づいて土づくり資材や堆肥を施用する。
3. 耕起や代かきにより田面を均平にし、漏水を防いで水を有効活用する。
4. コシヒカリの種期は4月20日以降、移植期は5月10日以降とし、出穂は8月5日以降とする。

1. 15cm 深耕と土づくり資材施用の実施

- (1) 耕深（作土深）を確保すると、根の分布範囲が広がり、水分やケイ酸が吸収されやすくなります。
- (2) 作業のはじめにはほ場の一部を耕うんし、ものさし等で耕深を測ってみましょう。
- (3) 耕深が目標に届いていなかったら、今より1～2cm 深くなるように設定し直しましょう。

【耕深のはかり方】

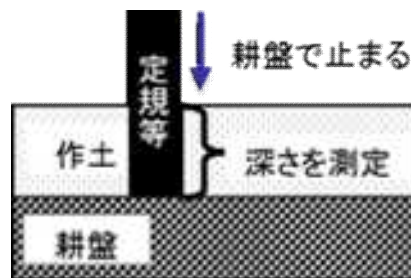


図1 前年の耕深の測定方法

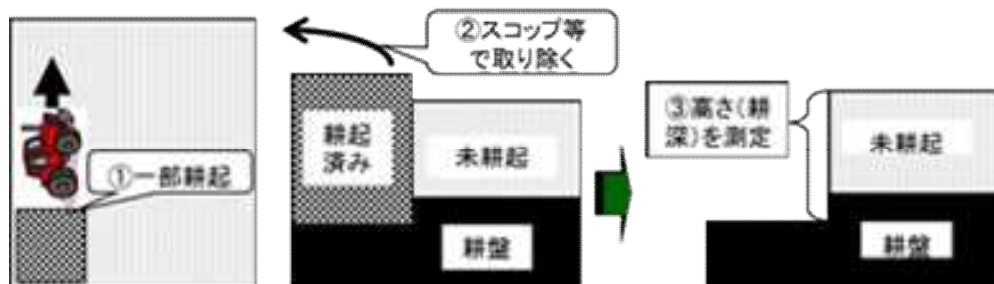


図2 耕起作業中の耕深の測定方法

(耕起済みのところは表面が盛り上がっているので、必ず未耕起の部分で確認する)

【土づくりの大切さについて】

堆（たい）肥や稲わらを連年施用すると、地力が向上して生育後期の窒素発現量が増加し、異常気象時でも稲体活力の維持と登熟向上に役立ちます。

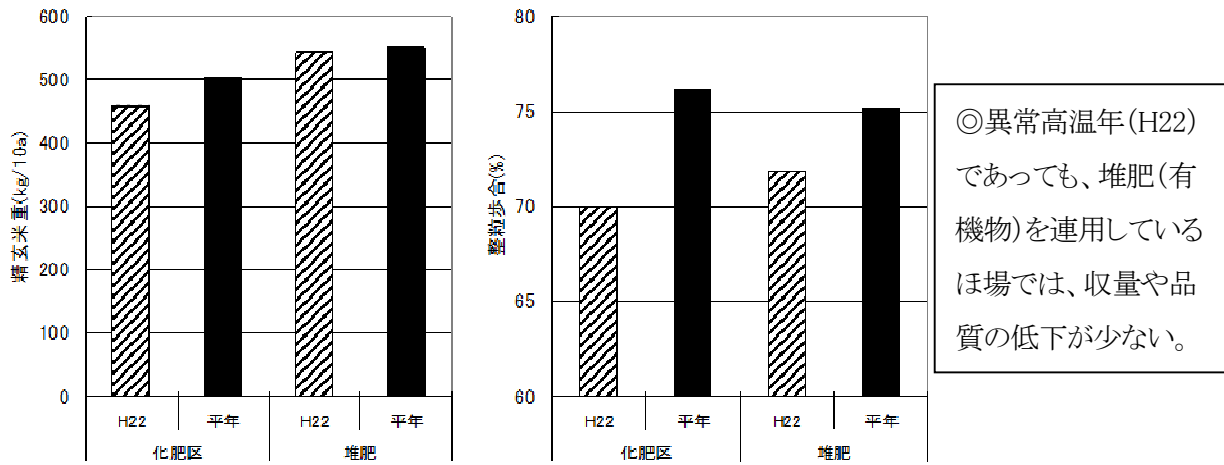


図3 化成区と堆肥（有機物）連用27年目ほ場の精玄米重と整粒歩合

◎この春からできること

- ① ケイ酸質資材を施用しましょう。
- ② ペレット鶏ふんなど、有機質肥料を活用しましょう。

【移植前追肥（弁当肥）】 田植え前4～5日頃に、窒素成分で1～2 g/箱を追肥する。

2. コシヒカリの田植えは5月10日以降

コシヒカリは、田植えを5月10日以降にすることで出穂期がおおむね8月5日以降となり、登熟初期の過高温による品質低下を避けることができます。（ただし、極端な遅植えは成熟期が秋冷となるリスクが伴うので避けましょう。）

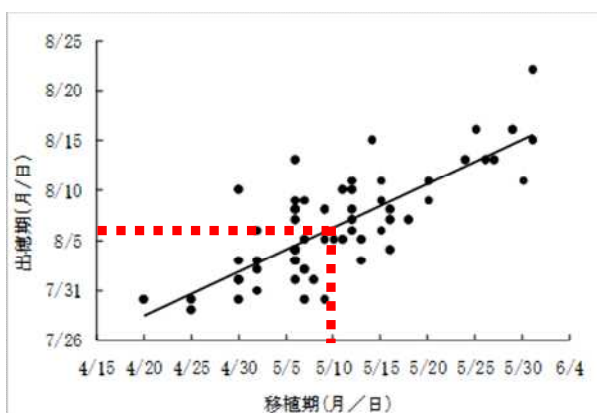


図4 田植えと出穂期の関係（H3～22年、作研（長岡市、標高30m）、コシヒカリ）



図5 出穂期と出穂後20日間の日平均気温の関係（長岡 AMeDAS より）

3. 苗の植付け本数は1株3～4本、 栽植密度はコシヒカリで50～60株/坪

- (1) 田植え時の苗の植え付け本数は、3～4本/株が適切です。植え込み本数が多くなると、茎が細くなり、倒伏や品質低下を生じやすくなります。
- (2) 植付け深さは、2～3cmとします。深植えは、分げつの発生が抑制され、初期生育が劣り、良質茎がとりにくくなります。
- (3) 栽植密度は、表1を基準に、品種、移植時期、土壌の肥沃度により調節しましょう。

表1 栽植密度の基準

早生品種	コシヒカリ	
	平坦地	中山間地
60以上(株/坪)	50～60(株/坪)	60～70(株/坪)

※ 穂数の確保しにくい中山間地や冷水地帯での疎植栽培は避けましょう。

※ 生育過剰が懸念される平坦地の肥沃なほ場では、疎植(50株/坪以下)と基肥窒素の減肥を行いましょう。

- (4) 田植えが極端に遅れる場合は、生育不足が懸念されるため、コシヒカリでは60株/坪以上、早生では70株/坪以上で植付け、茎数の早期確保に努めましょう。また、肥効の後ずれによる草丈の急伸長や過剰分げつ・細茎化が懸念されるため、基肥は1～2割減肥しましょう。

4. 田植え後は適正な水管理で活着と分げつ促進

- (1) 田植え後活着するまではやや深水(3～4cm)で管理し、低温や風による植え傷みを回避しましょう。活着後は2～3cmの浅水(田面の高い所が隠れる程度)にして水温の上昇を図り、分げつの早期発生を促しましょう。

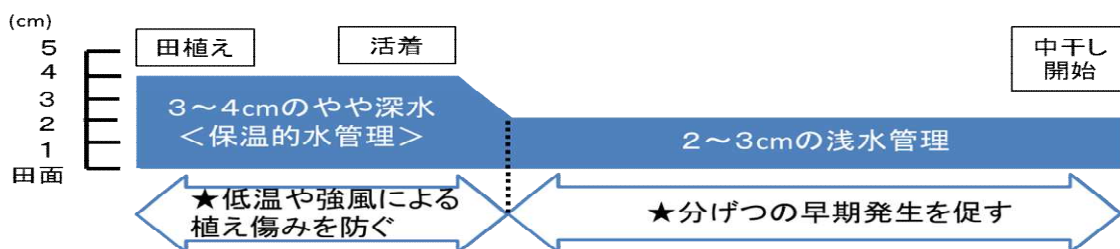


図6 田植え後の水管理イメージ

- (2) 水を更新する場合は、早朝にかん水し、日中は止水して水温を高めましょう。
- (3) ワキ(有機物等の分解で発生するガス)が発生した場合、水の更新や夜間落水により、ガス抜きを行いましょう。

5. 除草剤は適正に使用

- (1) 除草剤は一発処理剤の使用を基本とする。
- (2) 河川などへの流入を防止するため、初期除草剤を使用する場合は田植え前処理を避け、田植え時又は田植え後に使用する。
- (3) 処理後7日間は止水とし、落水やかけ流しはしない（厳守）。
- (4) 処理後4～5日間は湛水状態を保つ（厳守）。

<除草の効果を高めるためのポイント>

- 代かきは、できるだけ田植え時期に近づける。
- 田面の均平化を図り、田面を露出させない。
- 散布前に畦畔や排水溝を点検し、漏水を防止する。
- 散布ムラがないよう均一に散布する。

6. 育苗箱施用剤は病害虫の発生動向を踏まえて選定

(1) いもち病

いもち病の常発地では、コシヒカリBLでも、いもち病の発生が見られています。常発地では必ず育苗箱施用剤で防除しましょう。

補植苗は、葉いもちの伝染源になるので、補植が終わったら直ちに除去してください。

(2) 初期害虫

近年、局地的に初期害虫（イネドロオイムシ）が多発生しています。前年に初期害虫の被害が集中したほ場では、対象害虫に効果のある薬剤を使用しましょう。

<農薬使用の注意事項>

- 農薬を使用する際は使用方法、注意事項を必ず確認し、自己の責任において使用する。
- 農薬散布時は周辺への飛散、使用者自身の安全に十分注意する。
- 農薬使用後は使用農薬、濃度、使用量を防除履歴として記録、保管する。

○春の農作業安全確認運動が実施されています。農業機械作業の安全対策を見直してください。